

母国と居場所を作る人々
～ロンドンにて「ソマリランド」と名乗るコミュニティ団体活動～
Those Who Make Their Mother Country and Their Place
—“Somaliland” Community Organisations in London—

須永修枝（東京大学大学院 博士課程）
Nobue Sunaga (The University of Tokyo, Ph.D. candidate)

キーワード：社会統合、越境的活動、未承認国家、ソマリランド、自助努力

国境を越えて、出身地から遠く離れた異国で生活する人々は、各政策や分析視角によって「ディアスポラ」や「移民」、「外国人」など異なる用語で指示されるが、そこに共通するのは、本来いると想定される場所とは異なる地にいる人々という前提だろう。彼らが移動した先にて社会統合や排除の対象とされるのと同時に、通信手段や移動手段が発達した現代では、越境的に出身地と何らかの関わりを持っていることは、もはや珍しいことではなく、これまでも彼らの社会統合と越境的活動に見られる正負双方の相関関係が論じられてきた¹。

では、彼らが本来いると想定される場所が主権国家として認められていない場合はどうだろうか。彼らはどのように移動した先にて社会の一員になろうとし、同時に越境的な活動を成し遂げようとしているのだろうか。従来、所謂「未承認国家」を巡る議論にて、それを支える主体としてディアスポラの存在は指摘されてきた（Caspersen, 2012）。しかし、実際に彼らの社会統合や越境的活動の在り方について、事実を積み上げた議論は乏しい。

本報告では、未承認国家としてソマリランド共和国（以下、ソマリランド）を、そしてその人々が移動した先および活動の場としてロンドンを取り上げる。後述するように、現在ロンドンには「ソマリ（Somali）」と呼ばれる人々が多くいるが、そこにはソマリランドからのみではなく、政治的にソマリランドと対立する地域を背景に持つ人々が含まれている。この状況で、敢えて「ソマリランダー（Somalilander、ソマリランド人）」の存在を顕在化させようとするコミュニティ団体活動に着目し²、その社会統合と越境的活動について論じる。なお、報告で用いるデータはこれまで報告者が実施したロンドンでの聞き取り調査および参与観察に基づくものである。

未承認国家と評されるソマリランドはアフリカ大陸の東、通称「アフリカの角」と呼ばれる地域に位置している。この地域には、西欧列強が足を踏み入れる以前からソマリと呼ばれる人々が生活をしていた。その後、植民地政策を経ると、彼らはジブチ、エチオピア、ケニア、ソマリア共和国（以下、ソマリア）を構成する人々となった。1960年に旧イギリス領と旧イタリア領により構成されることとなったソマリアでは、旧宗主国の違い及び政治家による氏族関係を利用した政策によって人々の間で対立が生じ、1980年代には武力紛争が勃発した。この混乱のなか、イギリス領であった地域にて1991年に主権国家としてソマリランドの樹立が宣言され、独自に国家建設が進められてきた。しかし、ソマリランドは「事実上の国家」とも言われるように、現在まで国際的には主権国家として認められていない³。

本報告で議論の対象となるロンドンには、植民地時代の繋がりも影響し、ソマリランドを背景とする人々が多く生活している。彼らのなかには難民として逃れてきた人々もいれば、他国に逃れ、そこで国籍を取得し、その後ロンドンに移り住むことになった人々もいる。しかし、上述のようにロンドンにはソマリランドからのみではなく、紛争の悪化により旧イタリア領から逃れてきたソマリもおり、特に本報告で取り上げるコミュニティ団体があるロンドン西部では、彼らは混在して生活している。イスラーム教徒である彼らは、ロンドンにてイスラーム

¹ 例えば、それらの議論は Portes, Escobar and Arana (2008) に示されている。

² 本報告では、イギリスのチャリティ委員会（Charity Commission）に認められた団体のことを示す。

³ ソマリランドを巡る概念の整理については、遠藤（2015）を参照のこと。なお、同書ではソマリ・ディアスポラの動向についても論じられている。

ム嫌悪の対象となる緊張感や言語習得、就業や家庭における問題を共有しているが、同時に、通信手段や移動手段の発達により双方のソマリはそれぞれが由来する地域と何らかの関係を持っている。ゆえに、アフリカの角で確認される政治対立がロンドンに越境しやすい側面もある。

本報告で着目するコミュニティ団体は、この状況下にて、ロンドンで唯一ソマリランドを団体の名称に掲げながらソマリランダーの存在を周囲に可視化させようと活動している。例えば、この団体は2017年5月に、ソマリランドの独立宣言を記念したイベントを事務所近くの公共施設で行い、自らの存在を周辺地域の人々へ知らせようとした。また、この団体の事務所にはカフェテリアが併設されており、その理由の一つにソマリランダーが気軽に集まることができる場所を提供する目的があることから、彼らはロンドンにてソマリランダーを結び付け、ソマリランダーとして社会の一員になろうとすることを推し進めていると言える。

上記のように、ソマリランドを背景とする人々の特徴は、異国の地であるロンドンにてアフリカの角地域で政治的に対立している旧イタリア領を背景とする人々と共にソマリと見なされ、さらに「母国」となる場所が1991年に独立を宣言したものの、依然として主権国家として認められていないことである。それゆえ、彼らがロンドンでソマリランドの存在を訴え、ソマリランダーとして社会の一員になろうとしない限り、その「国家」はこの世界に存在しないものとなる。この点において、社会統合と越境的活動の区別は極めて曖昧となり、人々はロンドンという一つの場所で自らの母国と居場所を作ろうとしているように見える。

そして、この母国と居場所を作ろうとする動きは、それを担う人々に委ねられている。コミュニティ団体の活動に係わってきた人々は、仕事や家事との関係を鑑みながら時間を割き、活動に携わる人材や運営資金の確保を試行錯誤してきたが、時には事務局の機能やその他の事業が停止することもあった。彼らは、ロンドンという忙しい都市にて、自ら主張しなければ存在しないことになる母国と新しい生活環境での居場所作りに取り組んでおり、それらは彼らが活動を停止させるとどちらも消滅する。

未承認国家であるソマリランドを背景を持つ人々は、ロンドンにて母国と居場所を作ろうとする面において、社会統合と越境的活動を同時に行っている。そして、それらは彼らの自助努力に依拠するものであるため、彼らの自助努力がなくなるとどちらも存在しなくなる特徴がある。本報告では、どちらの側面においても保障が欠如する状況にあるコミュニティ団体の活動を自助努力という点に着目しながら取り上げ、最終的には本来いると想定される場所とは異なる地にて生活する人々を取り巻く環境について論じる。

参考文献

遠藤貢 (2015) 『崩壊国家と国際安全保障——ソマリアにみる新たな国家像の誕生』 有斐閣。

Caspersen, Nina (2012) *Unrecognized States: The Struggle for Sovereignty in the Modern International System*, Cambridge: Polity.

Portes, Alejandro, Cristina Escobar and Renelinda Arana (2008): "Bridging the gap: transnational and ethnic organizations in the political incorporation of immigrants in the United States", *Ethnic and Racial Studies*, 31:6, 1056-1090.